

インドネシア出張報告

小林 寧子

出張先：インドネシア

期間：2014年2月22日～3月10日

2月22日からアジア言語実習Bの引率でインドネシアのジョクジャカルタ市に出張したが、3月7日に担当任務期間が終了したあと、アジア・太平洋研究センターの支援を受けて、9日までジャカルタに滞在する機会を得た。

8日午前、国立図書館（Perpustakaan Nasional）の雑誌閲覧室で1920年代から30年代の定期刊行物を2種類閲覧し、その後国立科学院（LIPI）の研究者ヒシヤム（M. Hisyam）博士とインドネシア・イスラーム研究の動向について意見交換を行った。短い滞在であったので、活動はきわめて限られた。しかし、ジャカルタのゲーテ・インスティテュートで上演された史劇を鑑賞する機会を得たので、それについて報告したい。この劇は、国家女性人権委員会やインドネシア弁護士協会などの後援を受け、国際女性の日（3月10日）に合わせて、7日から9日まで3回上演された。筆者が観劇したのは初日である。

上演された「Nyani Sunyi Kembang-kembang Genjer（ゲンジェルの花寂唱）」は、「9・30事件」に連座したとして政治犯になった旧共産党系組織の女性活動家の証言に基づいて、脚本が書かれた。政治的緊張の高まったインドネシアの首都ジャカルタで、1965年9月30日（実際は10月1日未明）、陸軍指導者7名が拉致・虐殺された。すぐ反撃に出た国軍は、この事件の黒幕はインドネシア共産党であるとして、全国で反共産党キャンペーンを展開した。その結果、数十万人規模の共産党員やそのシンパが虐殺され、政権は初代大統領スカルノから国軍出身のスハルトへと交代した。インドネシアの内政外交の転換点となった大きな「事件」である。ドラマは、成人した孫娘に旧共産党系の女性組織（ゲルワニ）の活動家だった祖母が自らの体験を語り、そこに彼女の友人4名が訪れて旧交を温めると言う形で進行する。ゲルワニの幹部であった祖母はスラカルタ（中部ジャワ）に住んでいたが、事件後突然逮捕された。夫は行方知れずのままであり、刑務所で女兒を出産した。刑務所の外で育てられるようにと手放した娘とはその後一度も会うことはなかった。しかし、刑務所生まれということがわかって夫に捨てられた娘は、生まれたばかりの孫娘を残してこの世を去る。旧友と再会した祖母は、40年も隠していた秘密を吐露する。収監中に監督官の軍人に繰り返し強姦され、男児を出産していたのである。成人した孫娘は祖母たちが語る

体験と向き合う、この国では一体何が起きたのか。(ゲンジエルは、熱帯に咲くキバナオモダカのこと)

9・30 後、ゲルワニは拉致された将軍たちに性的拷問を与えたふしだらな女性というレッテルを貼られ、かつての活動家は誹謗中傷の中で生きてきた。80 年代末からインドネシアでは女性の NGO 活動家も活躍するようになったが、時として彼女たちに浴びせられたのは「お前はゲルワニだ！」という罵声であった。惨劇からすでに半世紀近くが経ち、すべては共産党の仕業で共産党関係者が犠牲になるのは当然というような公定史観がまだまかり通るのか、インドネシアの民主化の実質が問われる問題である。「事件」や惨劇自体が忘れ去られつつあるというのが、果たしてそうなのだろうか。この脚本は、65 年政治の犠牲となった女性たちを忘れるのを拒み、彼女たちに声を与えるためにつくられたという。海外団体の HIVOS (オランダの開発 NGO) や Elementair Production (在ロスアンジェルス) の財政支援を受けて製作・上演にいたった。

会場は女性活動家風情の観客 300 人あまりで埋まったが、ジルバブ (ムスリム女性が着用するスカーフ) 姿の女性は数えるほどだった。ジャワでは、共産党系の活動家を虐殺したり、その家族の女性を強姦した実働隊はイスラーム団体ナフダトゥル・ウラマーの青年部だったと伝えられている。しかし、劇の中では国軍は批判されても宗教団体への言及はなかった。避けられていたのだろうか。もしそうであれば、それこそが社会に和解できない亀裂がある証拠のように思えるのだが。ただ、上演に際して少なくとも妨害活動は見受けられなかった。